都市と建築の関係性に関する研究

The study of the relation between city and architectures through case-studying the architectural theory and the method practiced by Italian Arch. Giancarlo De Carlo

02M43171 清野 隆

Takashi Seino

指導教官 土肥 真人 Adviser Masato Dohi

SYNOPSIS

In Italy hystrical center are not only well conseverd but vitalized. The purpose of this thesis is to study the methods and practices of an Italian architect Giancarlo De Carlo, who realized the best model case of Urbino.

Through this study we find as below. His method has complex and flexible structure and in the practice he took various methods according to condition. In fact, city is configured by architectures, but we consider that it is not possible to built city in a few years.

1.はじめに

1-1.研究の背景と目的

現在の日本に都市はあるのだろうか。都市と建築の関係は 希薄で、危うい関係に見える。イタリアの都市では現在でも18 60年以前に形成された市街地(以下歴史的都心部)が保護さ れ、歴史的建築物が活用されているだけでなく、建築物やオ ープンスペースも含めた都市全体が、住民の生活の場として 機能し続けている。歴史的な都市は景観の美しさだけでなく、 生活の豊かさが感じられる。イタリアでは、戦後の高度経済成 長によって生じた都心部の衰退に対し、「旧市街地は歴史的 遺産として保存されるだけでなく、住民が生活する場として保 存の対象と捉えられるべきである」という世論が生じた。これに 合わせて都市計画関連制度が整備され、その後、都心部を保 護する理論の構築と実践が試みられてきたことが背景にみら れる。その結果、現代のイタリアでは歴史的環境に配慮する建 築設計や都市計画は、もはや前提となっている。

このような背景と現状を持つイタリアにおいて、重要な役割 を果たしてきた建築家の一人にジャンカルロ・デ・カルロが挙げ られる。彼は自然と歴史に配慮した建築設計の実践を通して 歴史的な都市を再生させており、歴史的な都市空間を維持す ることに貢献してきた。このような実践は、イタリアとは対照的な 日本の都市の状況を正確に把握し、本質的な問題を捉えな おす必要性を示唆していると考えられる。

<u>1 - 2 . 研究の方法</u>

本研究では、先述のイタリア人建築家ジャンカルロ・デ・カル ロに着目し、彼の 建築・計画理論と実践手法を分析・把握す ること、また、 彼の理論と実践から都市と建築の関係を考察 することを目的とする。

2章で、デ・カルロが建築 家として活動を開始する時

1章 研究の背景と目的			
2章 近現代の建築/計画理論の変遷			
<u>3章 G.D.Cの活動変遷</u>			
4章 G.D.Cの建築 都市計画理論 5章 G.D.Cによる 実践の手法			
6章 総合的考察			
7章 結論			

【図1論文構成図】

期の建築界の動向を把握する。3章で、デ・カルロの全体像を 作品と活動から把握する。4章では、デ・カルロの建築理論と 都市計画理論の体系を、5章では実践手法を分析する。6章 では、2章から5章までの成果を踏まえて、総合的考察を行う。 【図1】

1-3. 先行研究

本研究で取り上げる建築家ジャンカルロ・デ・カルロについ ては、イタリアをはじめとして海外では数多く研究されており、ウ ルビーノ都市基本計画、使用者の参加を取り入れた集合住宅 設計についての研究がみられる。また、日本においては建築 雑誌上で作品が紹介されるに止まっており、彼の理論と実践 手法を対象とし、建築と都市の関係を考察する研究はみられ ない。

<u>2.近代建築理論の変遷</u>

<u>2 - 1.はじめに</u>

2章では既存の建築史文献を基に20世紀以降の建築家が 構築した建築理論を概観する。近代建築家は新しい都市モデ ルの構築を試みている点に着目し、CIAM(近代建築国際会 議)とTeam10にみられる建築理論変遷の把握を目的とする。 2-2.CIAMにみられる建築理論

1928年に設立された CIAM では近代建築は最小労働を実 現する方法として合理的な建築生産を目指し、「生活最小限 住宅」「合理的建築方法」が議題に取り上げられた。1933年の 第4回 CIAM アテネ会議では、居住、労働、余暇、往来という 都市の4機能が提示された。「アテネ憲章」作成を主導したル・ コルビジェによって考案された「機能的都市」では都市を機能 によって分節し構成していた。

	【表1:	CIAM沽動前後の王な動向】
年代	傾向	モデルと実践
1900年	初期合理主義	「工業都市」(1900年)
1910年		「新都市」(1910年)
	合理主義 CIAM設立(1928年)	
1930年	·合理的建築/機能的都市	「輝く都市」(1930年)
1940年	「アテネ憲章」(1943年) ・都市の4機能	
1950年	CIAM解散(1956年)	「チャンディガール計画」(1950年)
1960年	Team10結成(1956年)	
	・既存の都市や文化の存続	

<u>2-3. Team10 にみられる建築理論</u>

戦後の CIAM では場所の具体的な特性に対する関心が高 まり、合理主義建築の抽象的な議論に対して、既存の都市が 持っている性格や文化を存続させる理論が展開された。この 議論を主導した CIAM の若手メンバーによって、CIAM は終焉 し、Team10が結成された。Team10のメンバーである P.スミッソ ンは都市の4機能に代えて、住居、街路、地域、都市という4つ の基準を示した。A.V.エイクは建築に構造主義を導入した。

3.建築家ジャンカルロ・デ・カルロの作品と活動

3-1.はじめに

3章では、ジャンカルロ・デ・カルロの作品集を基に作品の傾向と活動を概観し、彼の全体像を把握する。

<u>3-2.作品</u>

建築家ジャンカルロ・デ・カルロは1919年に生まれ、1940 年代より設計活動を開始した。デ・カルロは建築設計97件、都 市計画33件を手掛けている。作品内容を見ると、1970年代 前半までに集合住宅設計と都市基本計画作成に、1980年代 には都市再生計画に多く携わっている傾向がみられる。代表 的な作品としてウルビーノ都市基本計画とウルビーノ大学関連 施設が挙げられる。デ・カルロは建築と都市計画の2つを領域 としている。

【表 2 作品·活動変遷図】



<u>3-3.活動</u>

設計・計画作成以外の活動に着目すると、CIAM、Team10 などの建築会議、イタリア国内の都市計画会議に参加してい る。また、1960年代から大学教授として、建築と都市計画教 育に携わっている。1970年代後半にはILA&UDを設立し、欧 米の大学から教授と学生を招き、理論とデザイン研究を共同 で行っている。また、執筆作品を多く残しており、建築雑誌「空 間と社会」を創刊している。

全著作(著書95,評論278)	Ιſ
→ 入手可能	⊧
対象文献I(著書42,評論170)	╎┝
	╎┝
記述内容による精査	
★対象の絞込み	
対象文献II(著書36,評論66)	╞
	ւլլ

【表3抽出したテキスト数】

- 1				
	視点	キーワード数	テキスト数	
-	[]	5	35個(15 文献)	
ן ני	[]	4	27個(15文献)	
	[]	6	23個(15文献)	
- ا	[]	5	26個(14文献)	
	全体	20	111個(32文献)	

【図2対象抽出プロセス】

<u>4.ジャンカルロ・デ・カルロの建築・計画理論</u>

<u>4 - 1.はじめに</u>

ジャンカルロ・デ・カルロが自ら執筆した著作を分析対象とし て彼の建築理論・都市計画理論を把握する。具体的には、 []建築観、[]都市観、[]建築計画・建築設計に関する 方法論、[]都市計画・都市デザインに関する方法論を論じ ているテキストを抽出し、これを分析対象として彼の建築理論・ 都市計画理論を把握する。対象文献数は著作35件、評論66 件である。対象著作の選定手順を[図2]に示した。抽出された テキスト数は111個となった【表3]。

<u>4 - 2 . キーワードとテキスト内容</u>

抽出されたテキストを[]~[]ごとに、その内容で分類し、 キーワードを付した【表4】。以下で[]~[]の全体像とキー ワードの内容を説明する。【】内はキーワード、()内はキーワ ードに該当するテキストの数を示している。

[]建築観

建築観を表すキーワードは5つあり、【 - :建築は人々の 使用と関わる】【 - :建築は社会と共に変化する】【 - :建 築は人間の活動を可能にする】【 - :建築は形態と機能の 関係を一致させる】は建築の本質についての内容であり、【 -

:建築は自然と歴史に調和する]は建築のあり方について論 じている。【 - 】は10個のテキストを含んでおり、特徴的であ るといえる。

(- :建築は人々の使用と関わる](10)

デ・カルロは、本来ならば建築はそれを使用する人たちによって評価されるものであると捉えている一方で、人々が建築に 対して興味を示していないと論じている。

(- :建築は人間の活動を可能にする](3)

建築の目的は「人間の活動を可能にする」こと、人々の活動 と意図を目的とした場所をつくること、合理的な社会の仕組み を具体的にすることであると論じている。

[]都市観

都市観を表すキーワードは【 - :歴史的な都市は現代に 対応できない】【 - :現代の都市は複雑であるが、似通って いる】【 - :都市の形態は人々の活動によってつくられる】 【 - :都市は様々な構成要素の総体である】の4つがみられ、 1960年代と1980年代の著作を中心論じられている。【 -

](-]はそれぞれ歴史的な都市と現代の都市の現状を 【表4テキスト内容】

キーワード	著作番号	₹	
[-]	[1987-c]] 建築言語が、建築に < 未熟 > であるけれども、日常生活の空間を改善し、改良し続けている人々の無数の創造的な貢献から孤立し、失ってしまったことによるのです。	
[-]	[1983-A]	[1983-A] 建築の目的は人々の活動、意図を目的とした場所を造るることである。(全ての場所が賑わっている必要はない,賑わった生活は消費の目的(道具)である。)	
[-]		1968-A] 第68-A] 「大同体の文化は取って代り、消滅し、歴史の痕跡は取って代り、消えてゆく。	
[-]	[1986-C]	歴史的都心部は様々な建築的価値を持った建物が共存しており、分割不可能な総体である。全てが一体となって、ただ一つの文脈を形成している。	
[-]	[1989-f]	まちは有機体のようなものである。その全ての構成要素は密接に 有機的に 他の全ての構成要素と繋がっている。1つの構成要素に作用すると他の全てに反応を持つ。	
[-]		伝統は全ての時代の文化価値が絶え間なく融合したものである。つまり、文化価値が持つ進歩的な緊張によって特徴付けられる。自由と正義という何よりの財産を増大させる質に よって評価されるのである。	
[-]	[1997-A]	変化を受け入れ、可能な限り促進する必要は大切である。それには、有効で、快適で、記憶に残る解決を考慮しながら、空間を組織し、空間に形態を与える問題に対峙すること、 好奇心、繊細さ、暴力的でない、楽観的、提案的でいることが大事である。	
[-]		表現の豊かさを再獲得するためには、建築は大いに刺激を必要としています。このことが私の参加する建築の信念に対するもっとも重大な理由なのです。	
[-]	[1983-A]	計画は解読によって始まった。解読は、都市構造の要素を理解するのに必要である。歴史的な文献に目を通すこと、都市形成を直接観察することによって解読は行われた。	
【 - 】 注)著作番号		読むこととは物理的空間に残された後を確認し、積み重ねられた層から引き出し、解釈し、整理し、現在意味を持つシステムに再編成することである。 職するための番号 [年度 - 大文字]は著書,[年度 - 小文字]は評論を表す	

対象として論じたものであり、【 - 】【 - 】は都市の本質を 論じた内容であった。

(- :都市の形態は人々の活動によってつくられる](5)

都市の形態は「人間の経済的活動・社会的活動を物理的 空間で具体化し、実現する」ことによって生じている過程と捉え ている。都市の形態と構造は共同体の変遷の記録であり、共 同体の歴史である。

(- :都市はさまざまな構成要素の総体である)(7)

都市は建築が集合して形態をつくっているとし、さらに建築 の総体によって構成される街路や広場をはじめとするオープン スペースによって構成されると考えている。また、都市の構成 要素はそれぞれ他の構成要素と密接に繋がっているとし、「都 市は有機体のようなものである」と論じている。

[]建築計画·建築設計に関する方法論

建築計画・建築設計に関する方法論を表すキーワードは I :伝統を尊重しながら変化を促進する】(:参加す る建築】(- :計画を試行的に進める)(:建築を解読 :潜在的な活力を引き出し、現在と共存させる] する】 :地域の特徴を取り入れる]の6つがみられる。(I 1 は計画の進め方を論じている。他のキーワードは伝統、地域の 特徴を建築に取り入れること、参加する建築を論じている。デ・ カルロが建築を使用する人、建設される場所、地域の特徴を 重視して、建築設計していると考えられる。(-)に関する 内容を示すテキストが多くみられた。

【 - :伝統を尊重しながら変化を促進する】(3)

「伝統は全ての時代の文化価値が絶え間なく融合した もの」として捉えており、「伝統を尊重すると同時に変化 を受け入れ、それを促進していく」ことを論じている。 【 - :参加する建築】(7)

1970年代の著作に多くみられ、3つの側面について論じて いる。1つ目は参加する建築のあり方についてである。2つ目 にその効果についてである。3つ目に参加する建築を行う理由 である。人々が自らの必要性を表現することによって建築は多 くの影響を受けるとし、「建築の表現の豊かさを再獲得する」こ とを論じている。

[]都市計画・都市デザインに関する方法論

都市計画・都市デザインに関する方法論を表す方法論は5 つあり、そのほとんどが 1980 年代に論じられている。 時代に合わせて都市を変えていく】[:都市に正確な役 割を与える][:都市を総体的に計画する][:都市



【図4理論の体系】

を解読する] [:都市の特徴を維持する] の5つのキーワ ードが抽出された。[-][-]という方法論は、都市を理 解することによってはじめて可能となる方法論として捉えられる。 [-]は都市計画・都市デザインに関する方法論において 基本的な手法として位置付けられていると考えられる。

【 - :都市を解読する】(6)

都市構造の要素を理解するための方法論であり、「空間に 残された痕跡を発見し、現在意味のあるシステムに再編成す る」こととしている。また、計画の対象となる地区を越えて行うこ と、時間の制限を受けない作業であるとしている。具体的には、 「歴史的な資料に目を通すこと」「直接空間を観察すること」とし ている。

<u>4-3.理論の体系</u>

[]~[]のキーワード同士の関係を考察した【図3】。 (1)建築観と都市観を表しているキーワードには、相互関係が 見られる。建築と都市は共に人の活動を実現する形態を持つ ものであるという本質的な見方をもった3つのキーワードを基に 構成されている。

(2)建築計画・建築設計に関する方法論、都市計画・都市デ ザインに関する方法論は、都市観と密接に関係する建築観、 建築観と関係をもつ都市観を実現するものとして捉えられる。 方法論は複数の建築観と都市観から説明される。

(3)方法論は、時代、伝統、使用者、地域の特徴、都市の特徴などの具体的な対象を得て初めて明らかになる要素を活用 するという性質を持っている。

5.ジャンカルロ・デ・カルロの実践手法

<u>5 - 1.はじめに</u>

5章では、4章で明らかにしたキーワードを基に、デ・カルロ が建築設計・計画を実践した都市を建築作品の特徴と共に分 析することとする。デ・カルロが介入した建築設計と計画が行わ れた都市を対象として現実の空間を分析し、4章で明らかにな ったキーワードを用いて説明する。

<u>5-2.ウルビーノについて</u>

デ・カルロは1950年代から現在に至るまで、都市基本計画 作成と建築設計をウルビーノで行ってきた。イタリア中部マルケ 州に位置する丘陵都市であり、ルネッサンス期の歴史的遺産 が残されている。1950年当時主要財源であった農業による経 済が困難になったため、デ・カルロは計画により観光と大学活 動による経済構造へ移行させた。

<u>5-3.分析</u>

ウルビーノの都市空間と建築を対象に特徴を記述し、その 特徴が4章のキーワードとの対応を考察した【図4】~【図6]。 また、その対応関係を建築と都市といった空間のスケール別 に分類し、現実の建築や都市空間に対して、設計・計画理論 がどのように適用されているのか、分析を行った【図7]。

基本的な傾向として、建築に対する実践は建築観と建築に 関する方法論によって説明されており、また、都市に対する実 践は都市観と都市計画・都市デザインに関する方法論によっ て説明されている。しかし、建築に対する実践において、都市 観として説明される特徴をもっていることが明らかになった。

大学関連施設設計には、都市の特徴を維持するという都市 に関する方法論によって説明される実践手法が見られる。

6.総合的考察

6章では4章と5章を踏まえて考察を加える。

4章からは建築と都市を本質的に捉えるキーワードを起点 にして、建築観と都市観が交差するように関係をもっていおり、 方法論は建築観と都市観が作り出す構造を基に導き出されて いた。



【図 4】ウルビーノ大学教育学部
 歴史的都心部の南側に位置する 18 世紀に建設された旧修道院を修復し活用している【 - 】【 - 】。
 4 層で構成された大会議室は地面を16m 掘削して造られた空間を利用したもので、逆円錐状のトップライトによって採光されている【 - 】。
 ア 上に庭園を付属している【 - 】。



【図 5】ウルビー/大学経済学部

歴史的都心部南側に位置する[-][-]。 複合施設を修復し、活用している。庭園を付 属しており、ウルビーノの建築の特徴を取り入れて いる[-]。

また、内部にはデ・カルロが多用する表現の一つであるガラスで覆われた階段が設置されている (-)。



【図 6] ウルビー / 大学学生寮

歴史的都心部の外(-)にあるカプチ ーノの丘に建設された学生寮は丘の斜面に 沿っていくつものレベルにわたっている。 等高線に沿った同心円状の様々なレベ ルに配置された各諸室(-)は街路によっ て連絡されている。 形態、構成、使用された材料は周囲の景 観を配慮して設計された[-)

	建築		都市		
	ディティール	建物	建物群	歷史的都心部	ウルビーノ
大学センター		外壁残す[-]	未活用地区の古い研究所を	E修復【 】	
法学·教育·経済学部	ガラス使用【 】	庭園の創出【 】 外壁残す【 - 】	未活用地区の修道院を修復	ē()	
ピネタ地区		郊外に集合住宅を建設し	- 1		
学生寮	レンガ使用【 - 】		地形に沿った建物群(-	】 都心部外	への配置(-)(-)
メルカターレ広場				観光用駐車場への転用し	-]
地下駐車場		駐車場を地下に作る(-][-]		
斜路	駐車場への動線として修復 都市のイメージを強化【 -	[-]]			
エレベータ	広場と都心部を繋ぐエレヘータ	-の設置(-)			
サンツィオ劇場		劇場を修復し再生(-)			

【図7現実の建築・都市への理論の適用】

5章では、都市を維持していくこと、地域の特徴を取り入れる という方法論を示すキーワードが空間に表現されていた。それ は、都市に介入する方法で建築に5章で分析した実践を理論 に立ち戻って捉えなおすと、デ・カルロは建築を通して都市を 表現していると考えられる。都市の特徴を維持しようとするのは、 都市は建築を通して表現されるからである。

デ・カルロは建築に介入する際に都市の特徴や地域の特徴 を挿入することによって、建築を表現すると同時に都市を表現 していたと考えられる。都市や地域の特徴は、デ・カルロが実 践しているように建築を通してその都市の特徴を維持しつづけ ていくことによってのみ、都市は生きつづけていく。そのように 考えると、都市は特徴をもっていて初めて都市と呼べるように なると考えられる。

都市と建築は長い年月をかけて相互の関係を形成してきた。 また、この関係は常に変化していくものである。しかし、現代の 都市は人間の活動と形態を一致させるために変化したのでな く、機能によって規定された形態へと変化していると考えられる。 それは過去との関係を切断した変化である。過去の建築を保 存していくことの価値は、それ自体が文化的な価値をもってい ることでもあるが、建築と都市の関係を通して、人間と都市の関 係を考える一助となることにあると考えられる。

日本の都市の現状は歴史的な建築を喪失し、経済優先の 画一的な建築が建ち並ぶことによって、都市の姿を失っていく 過程にあると考えられる。この状況を一新することは不可能で あるが、建築を含めた日本の都市が存続していくためには、都 市と建築を再び結び直す繊細で緻密な作業が必要であると考 えられる。

7. 結論

本章では、以下の事が明らかになった。

(1)ジャンカルロ・デ・カルロの建築・計画理論は、時代、伝統、 使用者、地域の特徴、都市の特徴などの具体的な対象を得て 初めて明らかになる要素を活用するという性質を持っている。 実践においては計画対象の諸条件に従って、異なる方法論が 採られている。

(2)ジャンカルロ・デ・カルロの実践は建築に残された歴史と文 化を保存することではなく、現代に適応した建築に変えて人々 が使用しつづけていくことによって存続させている。それは、都 市の歴史を守り、存続させていく試みとして捉えられる。

(3)都市と建築の関係は都市のアイデンティティを形成するだけでなく、人間と人間が活動する場である都市の関係を再び 繋ぎ直すために重要であると考えられる。

参考文献

- Giancarlo De Carlo, Benedict Zucchi, Alinea Ed., 1992
 Urbanisti italiani, Paola Di Biagi e Patrizia Gabellini, Editori Laterza,
- 1992 Storia dell'architettura moderna, Leonardo Benevolo, Editori Laterza,

[·] Giancarlo De Carlo, Lamberto Rossi, Arnoldo Mondadori Ed, 1989

¹⁹⁹³

Dopo il movimento morderno, Josep Maria Montaner, Editori Laterza, 1996

[·] Giancarlo De Carlo Archotettura e Liberta, Editorice A coop, 2000

Giancarlo De Carlo, Antonella Romano, Testo & Immagine., 2001
 Complessi residenziali nell'Italia degli anni '70, Alfonso Acocella, Alinea

Ed. 1981 · I grandi architetti del Novecento, Paolo Portoghesi, Newton & Compton Ed. 1998